

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 櫻井 丈

本論文は、ユダヤ教の改宗制度の特徴を、ラビ文献、とりわけミシュナとタルムードで展開されたラビたちの思想に焦点を当て、それが信仰という人間の内面的変化だけではなく、身体的民族的な属性の変化をも含意する概念として把握されていることを論証した研究である。なかでも、改宗が成就すると、改宗者は新生児としてみなされ、それまでの親族的民族的な属性を喪失するというラビたちの思想から、改宗とは、ユダヤ的な民族的アイデンティティ (ethnic identity) を作り出すことを意味し、民族性とは決して実体的なものを指すのではないこと、「ユダヤ性」という民族概念は構築的恣意的な構造を持つ概念であることを、結論として提示する。

第1章は、バビロニア・タルムードの改宗に関する議論の読解を通して、ユダヤ教の厳格な改宗制度が明らかにされるが、法廷による手続きとしての改宗理論が確立されたのはタルムードの最終編纂の段階であるにもかかわらず、最終編纂者がこれをあたかもミシュナ時代に決定されたかのようなレトリックを用いていることが説得的に論証される。

第2章は、バビロニア・タルムードの「改宗者は新生児とみなされる」というラビたちの決定が、改宗前の血族関係(親子関係)を失わせる法的効力を意味することを論証する。文献学的分析から、バビロニア・タルムードの最終編纂者が、父方の血縁関係を断ち切る意図をもって文書操作を行ったことを解明して、虚構の思想的な出所が確認される。

第3章では、パレスチナのラビたちが、バビロニアとは違って、改宗者に「アブラハムの子孫」という父系出自を擬制することで、ユダヤ共同体の正式の構成員にするという主観的構築を行ったとして、改宗者の身分に対する異なる見解が紹介される。

第4章は、法廷が改宗を認定することで改宗者の身体に変化が起こり穢れに感染するという理論から、ユダヤ法は創造における神の分類行為を代理しているのだというラビ的観念が紹介される。

櫻井氏の研究は、改宗をめぐるユダヤ教の宗教思想の解明に重点を置いたため、改宗制度の歴史的な実態の考察とラビ文献に対する基本的な説明が十分なされたとはいえない。また、ユダヤという民族概念の虚構性を主張するとき、それは現代の「民族」という用語法への批判なのか、古代のエトノスという歴史概念に対する指摘なのかが必ずしも明確ではない点や、改宗 **conversion** という宗教学的概念を古代ユダヤ教に適用することの歴史的妥当性などの宗教史的な諸問題は、今後の課題として残されている。

とはいえ、ヘブライ語とアラム語を主とするラビ文献の読解に果敢に挑戦し、難解と形容されるタルムードのラビたちの議論を丹念に分析することによって、学的水準を維持しつつ改宗という行為をめぐるラビたちの思想の特徴を抉り出し、ユダヤ法のもつ事物分類行為の宗教的意義を指摘できたことの意義は高く評価される。

以上により、本審査委員会は、全会一致で、本論文を博士(文学)の資格に値する論文であると判断する。